

第2章 地域概況調査

1. 自然条件・気象環境調査

1.1 位置・面積

墨田区は、東京都の東部に位置し、足立区、荒川区、台東区、中央区、江東区、江戸川区及び葛飾区と接し、西と東を隅田川と荒川に挟まれている。

面積は、13.75km²で23区中17番目の広さである。東京都の総面積に対して0.63%、23区の総面積に対して2.21%を占めている。

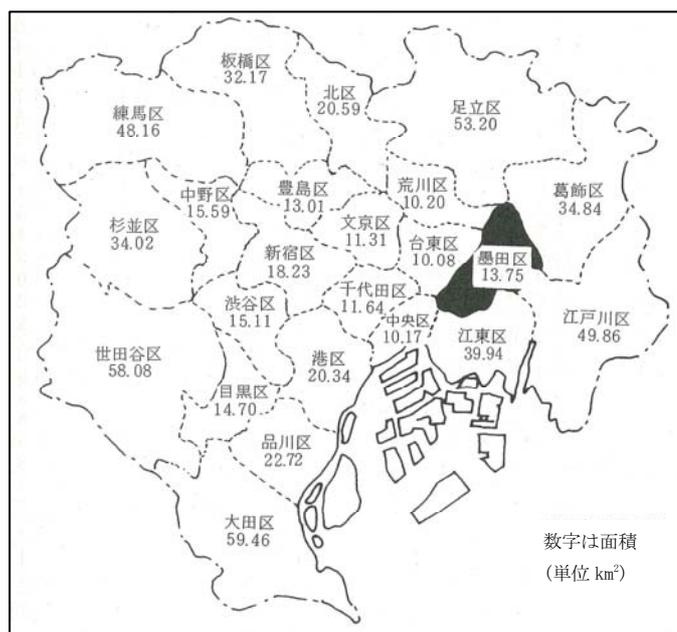


図 2.1-1 墨田区の位置

1.2 地形・地質

墨田区の地形は、旧利根川水系及び荒川水系の河口のデルタとして形成されたため、土地の起伏がほとんどない平坦な低地となっている。その中で、吾妻橋から向島にかけては、砂州や自然堤防といった微高地が分布している。また、北十間川から南の地域は、江戸時代以降に干拓された土地である。

最高地点は吾妻橋一丁目の隅田公園付近が AP(壺岸島量水標零位)4m、最低地点は立花六丁目の旧中川沿い付近が AP-1.2m で、隅田川沿いの一部を除く大部分の地域が東京湾平均満潮面より低い土地になっている。

墨田区の地質は、今から1万年より新しい時代に堆積した沖積層で、軟らかい粘土と砂の互層からなっている。沖積層の深さは地表から30m~40mの範囲で分布し、隅田川沿いで浅く、概ね北東部に向けて深くなっている。

1.3 気象

墨田区を含む東京都の年平均気温は15.9℃、月平均気温は8月が27.1℃、1月が5.8℃で

ある。年平均総降水量は1,466mmとなっている。

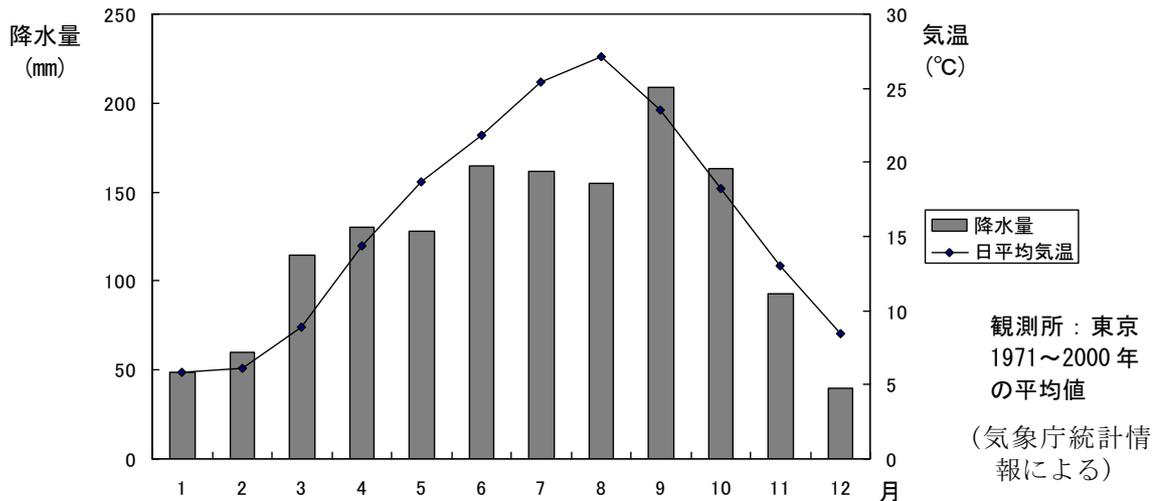


図 2.1-2 月平均の気温・降水量の変化

1.4 樹林

墨田区の緑は、墨堤の桜や神社の森にみられるように人々の生活と深く関わり合いながら育まれてきたが、関東大震災、戦災とその後の都市化の進行に伴って、かつての豊かな緑の大半は失われてしまった。しかし、墨田区では、緑の回復を目指して昭和47年に緑化宣言を行って以来、緑化が推進されてきた。

現在、主な緑は、荒川や隅田川沿いの緑地、東白鬚公園、隅田公園等の公園緑地や旧安田庭園、向島百花園といった文化的・歴史的な公園、幹線道路等の街路樹等があげられる。表2.1-1に示すとおり、平成21年4月1日現在、これらの植栽の総数は254,215本、そのうち高中木は31,848本となっている。

街路樹の樹種についてみると表2.1-2に示すとおり、「すずかけ」が最も多く3,250本、次いで「とうかえで」が1,226本、「はなみずき」が443本となっている。

また、墨田区で指定している保護樹木は69本である。

表 2.1-1 植栽現況 (平成21年4月1日現在)

名称	区分	総数	高中木	低木(株物)
	公園緑化等	区内公園・児童公園	169,493本	23,590本
こども広場		2,603	491	2,112
道路緑化	街路樹	5,260	4,309	951
	歩道緑地帯	46,154	413	45,741
	橋台地	7,161	769	6,392
	その他	10,956	1,663	9,293
河川緑化		12,588	613	11,975
合計		254,215	31,848	222,367

表 2.1-2 街路樹植栽現況 (平成 21 年 4 月 1 日現在)

名称 \ 区分	国道	都道	区道	計
すずかけ	506	1,315	1,429	3,250
あおぎり	0	108	176	284
やなぎ	0	1	45	46
えんじゅ	0	8	0	8
とうかえで	0	0	1,226	1,226
いちよう	0	213	54	267
あめりかふう	2	0	154	156
まてばしい	1	125	56	182
はなみずき	139	11	293	443
こぶし	0	87	178	265
ゆりのき	0	88	51	139
きんもくせい	0	0	264	264
その他	7	611	327	945
合 計	655	2,567	4,253	7,475

2. 社会条件

2.1 人口

墨田区の人口は、昭和15年(1940年)に当時の本所区・向島区をあわせて約48万人を記録したが、戦災により昭和20年(1945年)には約7万7千人まで激減した。

戦後の墨田区における国勢調査の人口は、昭和35年(1960年)をピークに平成7年(1995年)まで減少傾向が継続したが、その後の都心回帰により増加に転じ、平成21年7月1日現在、237,297人となっている。人口密度は、1haあたり170人で23区部の135人を上回る高密度となっている。

また、世帯数は増加しているものの、平均世帯人員は1.93人で減少の一途をたどっている。

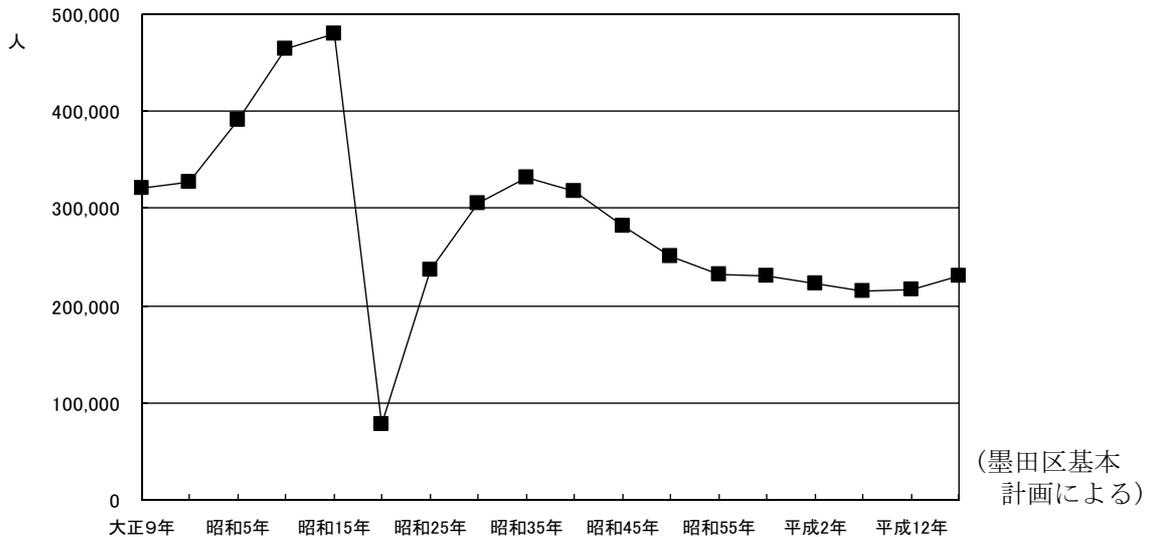


図 2.2-1 国勢調査による人口の推移

2.2 土地利用

墨田区の土地利用は、住宅用地が23.8%、商業用地が13.2%、工業用地が10.9%で、全体の5割弱を占めており、住商工が複合した土地利用となっている。

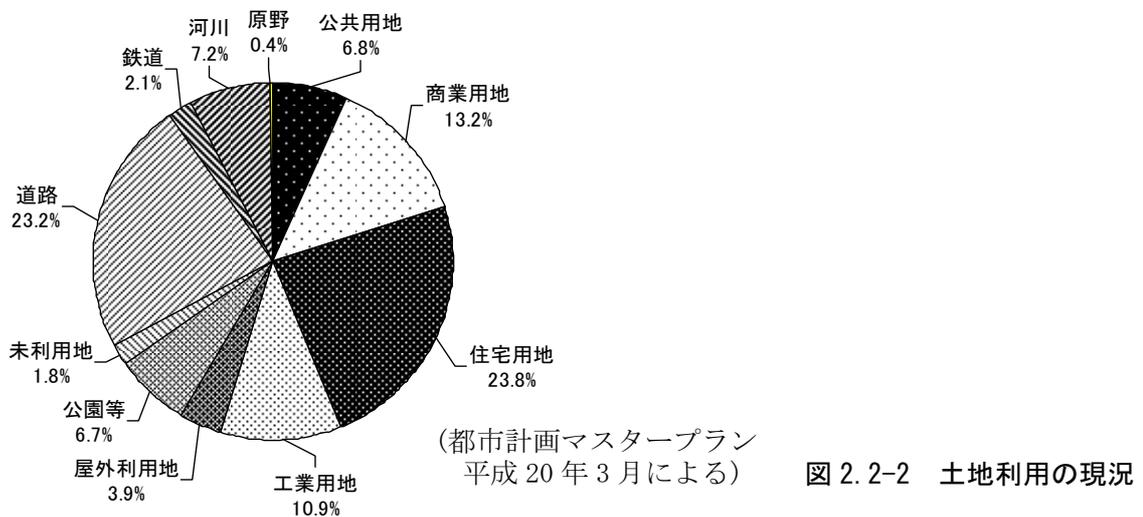


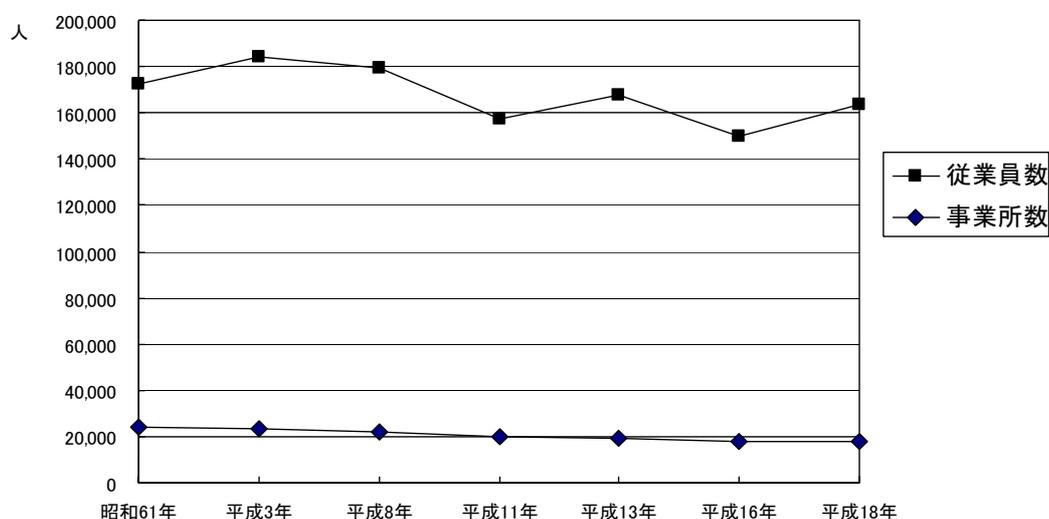
図 2.2-2 土地利用の現況

2.3 産業

墨田区は城東地域の中心に位置し、平成 18 年事業所・企業統計調査では、事業所が 17,940、従業員数が 163,661 人となっている。昭和 61 年(1986 年)からの経年変化では、事業所数、従業員数ともに減少傾向にあったが、近年やや増加傾向にある。

墨田区の産業構造は、第 3 次産業が 68.0%、第 2 次産業は 26.0%となっている。全事業所数のうち、製造業が 26.0%を占めており、その構成比は東京都の 2 倍以上であり、墨田区が製造業のまちであることを示している。また、区内の事業所の規模は、その約 91.6%が従業員 19 人以下の小規模事業所となっている。

産業では、繊維・機械金属・皮革・紙・ゴム・プラスチック等の業種の製造業が集中し、なかでも日常生活必需品を中心に、商業、サービス業が相互に連携し合い、多様な消費者ニーズにこたえられる特質を備えた地場産業を形成している。



(墨田区基本計画による)

図 2.2-3 事業所数と従業員数の推移

2.4 交通

墨田区には、JR 総武本線、都営地下鉄浅草線・新宿線・大江戸線、東武鉄道伊勢崎線・亀戸線、京成電鉄、東京メトロ半蔵門線が通過しており、交通利便性が高くなっている。バスは、都バスが 27 系統、京成タウンバスが 1 系統あり、区内を縦横に結んでいる。

一方、道路は、平成 20 年 4 月 1 日現在、総延長で約 288km あり、そのうち特別区道が約 88%を占めている。

2.5 公害

墨田区は、住宅・工業・商業の混在するまちであることから、騒音、振動等の公害が発生する要因を多く抱えている。

区民からの公害の苦情・陳情は、多種多様なものであるが、季節的には窓を開放する 3 月～9 月の期間が多くなっている。これは、過密化した住・工混在の立地条件が大きな要因と考えられている。件数で最も多いのは騒音、悪臭、振動である。近年は土壌汚染の相談も多

くなっている。

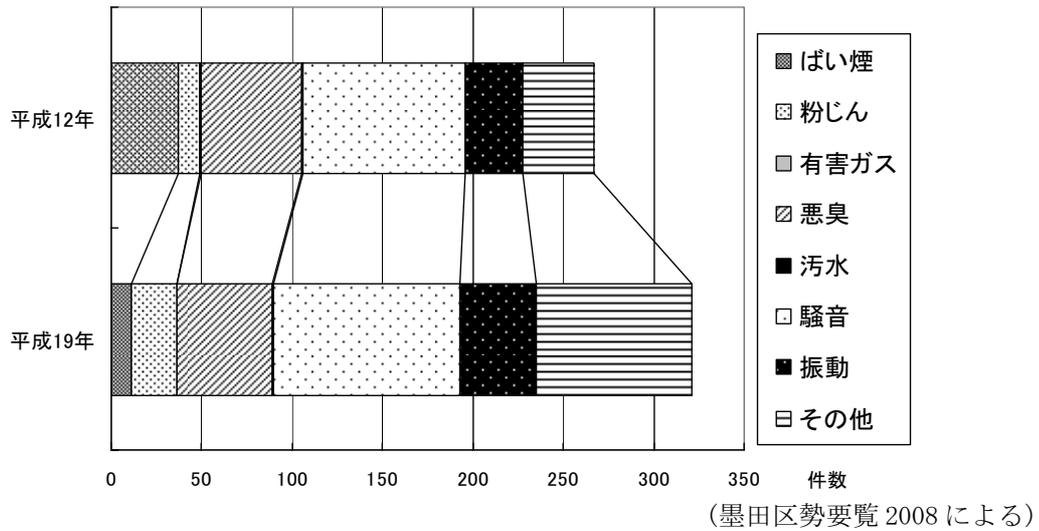


図 2.2-4 公害苦情件数の推移

道路交通騒音は、いずれの測定地点でも、昼間・夜間ともに環境基準の前後を示す測定値となっている。

河川の水質は、BOD(生物化学的酸素要求量)、SS(浮遊物質質量)、pH(水素イオン濃度)が、いずれの調査地点でも環境基準を満たしているが、DO(溶存酸素量)は、一部の地点で基準を達していない結果となっている。

大気汚染については、窒素酸化物、光化学オキシダント、浮遊粒子状物質 (SPM) 及び揮発性有機化合物 (VOC) などの大気汚染物質による健康への直接の影響のみならず、窒素酸化物など酸性雨を引き起こす原因ともなるため、発生源対策が求められており、特に自動車等の移動発生源からの影響が大きいと考えられている。

墨田区では、平成 18 年 4 月に「すみだ環境基本条例」を制定するとともに、区、区民及び事業者がより良い環境の創造をめざす目標や施策、その手法を明らかにした「すみだ環境の共創プラン(すみだ環境基本計画)」を策定し、環境政策を推進している。

3. 墨田区の歴史と緑の変遷

3.1 墨田区の歴史

墨田区は、縄文時代は海底であったが、それ以降に河川の堆積作用によって形成された土地である。墨田区が歴史の記録に登場するのは平安時代である。当時は区の北西部は農村地帯であり、南部は、まだ人家もまばらな湿地帯であった。

南部が開発されたのは、江戸時代に入ってからで、明暦の大火(1657年)の復興として幕府が開拓を行い、その後、江戸の一部として武家屋敷を中心とした住宅・商業地域として発展してきた。その一方で、北部は、依然として農村地域として江戸市内に農産物を提供していたが、隅田川一帯は、江戸の町人にとって絶好の遊覧の地として多くの文人墨客の訪れるところとなっていた。

明治維新を迎え、江戸は「東京」と改称されて首都となるなか、明治11年(1878年)には南部に本所区が発足した。北部は南葛飾郡に編入されたのち、昭和7年(1932年)に隅田・寺島・吾嬬の3町が合併して向島区が発足した。墨田区の地域は、河川の水運や労働力の供給といった面での好条件が工業地帯としての歩みを固める要因となって、日本における各種軽工業の発祥の地となり、近代工業地帯として重要な役割を果たしてきた。

しかし、大正12年(1923年)の関東大震災によって、南部地域は地震とそれに伴う火災のため9割強の家屋が失われ、死者も4万8千人と東京市全体の8割強に達する惨状を呈した。やがて、復興期を経て都市化が進んだが、第二次世界大戦により再び区内の7割が廃墟と化し、6万3千人の死傷者と30万人近くのり災者をだした。

終戦後の昭和22年(1947年)には、本所区と向島区が統合され墨田区が誕生した。当時の人口はわずかに14万人であったが、やがて焼け跡にも住宅や工場が建ち、産業のまちとして復興した。昭和28年(1953年)には工場数が戦前を上回り、商業面でも飛躍を遂げ、30年代の高度成長期を迎えた。急速な経済発展のなかで工場には新技術が導入され、大型店舗やスーパーも進出、道路等の生活環境も急速に整備されてきた。住民登録による人口は、昭和38年(1963年)の32万6千人をピークに減少傾向をたどったが、近年は増加に転じている。

昭和50年代以降は、拠点地区でのまちづくりが進行し、国技館・江戸東京博物館等の拠点施設、錦糸町駅周辺の再開発、大規模工場跡地の複合開発等が行われてきた。さらに、現在、曳舟駅前でも市街地再開発が、押上・業平橋地区で「新タワー」の建設が進行している。

3.2 緑の変遷

墨田区は、隅田川に代表される水辺の低湿地に開けた農村地帯であったことから、まとまった樹林や大木の少ない土地であったが、吾嬬の森(現在の吾嬬神社)の「連理の樟」や源頼朝が寄進したと伝えられている水神の森(現在の隅田川神社)、開拓者の氏神として永万元年(1165年)に創建された香取神社等の鎮守の森、曳舟川川端のヤナギ並木、そして徳川吉宗が築いた墨堤の桜が、昔あった墨田区の風景として広重の描いた「名所江戸百景」等の資料により伝えられている。

その後、南部は、明暦大火をきっかけとした本所一帯のまちづくり、そして明治、大正期に市街地化が進んだが、関東大震災により壊滅的な被害が発生した。震災後の震災復興区画

整理事業では、現在の隅田公園、錦糸公園等の大公園が整備された他、菊川公園、中和公園等の公園が多数新設された。また、街路の整備に伴い街路樹の植栽も進められた。

しかし、昭和 20 年の墨東地区を襲った大空襲により「墨堤の桜」に代表される緑は、ほとんどが焼失し、樹林や大木は社寺境内の一部に残されるのみとなった。さらに、戦後の復興と高度成長を背景に農村地帯として残されていた北部でも、都市基盤の整備が追いつかないままに密集市街地が形成されてきた。

墨田区では、緑の回復をめざして昭和 47 年(1972 年)に緑化宣言を行い、緑化を推進するとともに、その後の市街地整備により東白鬚公園、大横川親水公園等が整備された。現在では、大規模な建物や集合住宅の建設に対する緑化指導、立体(屋上・壁面)緑化の推進、公共空き地の緑化推進、道路緑化等を実施している。

3.3 公園緑地の整備状況

墨田区における都市公園は、平成 21 年 4 月 1 日現在、公園と児童遊園を合わせた区立公園 138 箇所、都市公園 3 箇所を合わせて 141 箇所あり、区民 1 人あたり 2.86m²となっている。

代表的な区立公園は、隅田公園、錦糸公園、回遊式潮入池のある旧安田庭園、吉良上野介の屋敷跡に設けられた本所松坂町公園等があげられる。都立公園は、横網町公園、向島百花園、東白鬚公園の 3 箇所である。

表 2.3-1 都市公園の状況 (平成 21 年 4 月 1 日現在)

区分		箇所数	面積	1 人あたり面積
区立公園	公園	66	533,955.83m ²	2.18m ²
	児童遊園	72	35,029.39m ²	0.14m ²
都立公園		3	133,593.01m ²	0.54m ²
総数		141	702,578.23m ²	2.86m ²



1957年撮影

(国土地理院ホームページによる)



2009年撮影

(本調査で撮影)

大正時代から工場が立地していたが、1969年「江東再開発基本構想」に基づき、1972年から「白鬚東防災拠点」として整備着工、1983年に完成した。東白鬚公園や街路樹等が整備されている。



1963年撮影

(国土地理院ホームページによる)



2009年撮影

(本調査で撮影)

1981年から大横川の一部が埋め立てられ大横川親水公園として1993年に完成した。かつての水路の部分が緑の空間に変化している。

図 2.3-1 航空写真による緑の変遷